聖　書：創世記 50：1～26
説教題：神は必ずあなたがたを顧みて
日　時：2024 年 8 月 11 日（朝拝）

創世記の最終章となりました。創世記後半の主人公を務めて来たヤコブが前の 49 章最後で死にました。波乱万丈の 147 年の生涯でした。このヤコブの死を前にしてヨセフが崩れ落ちて泣いたところからこの章は始まります。ここに改めて描かれているのは死の悲しく厳しい現実です。本来、神が創造された当初の世界には死がありませんでした。神が人間を造られたのは、ある程度の期間、地上で生きた後、死ぬためではなく、永遠に神とともに生きるためでした。しかし最初の人間アダムの罪によって死が世界に入り、人はみな死ぬ者となりました。愛する者との別れを皆が経験しなければならなくなりました。この死を前にしてヨセフは泣きました。聖書はこうして良いとしています。それは責められることではありません。イエス様もラザロの死を前にして涙を流されました。同じように神を信じる信仰者も泣いて良いのです。

しかしいつまでもそうするだけではありません。テサロニケ人への手紙第一 4 章 13 節に、信者は「望みのない他の人々のように悲し」まないと言われています。クリスチャンは死を前にして泣いて良いけれども、同時に「望み」を持っています。ヨセフもその望みを持っている者として行動します。彼は父の遺言に従って、カナンの地のマクペラの畑地にある洞穴に父ヤコブを葬ります。ヤコブはこのことを 49 章の終わりで息子たちに命じていました。そこにはアブラハムと妻サラ、イサクと妻リベカ、そしてヤコブの妻レアがすでに葬られていました。これは神の約束に従って私たちは必ずこの地を受け取るのだ！という信仰の行為でした。ヤコブも同じ信仰に立つ者として、ここに葬られることを求めました。しかし彼らの心は地上の土地にあったのではなく、その地上の土地が指し示す天の土地、天の都にあったとヘブル人への手紙 11 章 13～16 節は語っています。「これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。・・・しかし「実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」　地上における約束の地カナンは、やがて神が導き入れてくださる真の約束の地、天の御国の写しでした。そしてここには当然、地上の命がすべてでは

ないという考えがあります。神はご自身の民を、死を越えて神とともに生きる永遠のいのちに生かしてくださる。天の都、天の故郷でということです。その信仰と希望に立ってヨセフはここで行動します。

彼はまず父をミイラにするよう命じました。エジプトでは特に位の高い人の間でミイラにすることが盛んに行われたようです。しかしヨセフはただ彼らの習慣に従ったのではなく、これは父の遺体を腐敗を防ぎながらカナンに運ぶためです。このために40日を要しました。そして合計70日間エジプトはこのために喪に服しました。

その期間が明けた時、ヨセフはファラオに父の葬りに出かけるための許可を取ります。ファラオは「行って、葬って来なさい」と言います。そしてファラオの多くの家臣たち、多くの長老たちが同行しました。さらに戦車や騎兵もヨセフとともに上って行きました。子どもたちと羊や牛などの家畜は置いて行きました。それはエジプトに再び戻ってくるしるしでもあったのでしょう。こうして一団はヨルダンの川向こう、ゴレン・ハ・アタデに着きました。このヨルダンの川向こうとはヨルダン川の東側なのか、それとも西側なのか明確ではありません。約束の地に身を置いて見るなら、川向こうはヨルダン川東側の地となります。その場合、約束の地を通ってわざわざ東側へと出て行く意味はありませんから、これは彼らがエジプトを出た後、直接カナンの地には入らず、死海の南を通り、約束の地を迂回するようにしてヨルダン川東側を北上したと考えられます。その東側の地にゴレン・ハ・アタデはあったことになります。一方、このゴレン・ハ・アタデがヨルダン川西側にあったとするとどうなるでしょうか。この場合も「ヨルダンの川向こう、ゴレン・ハ・アタデに着いて」という表現からすると、やはりヨルダン川東側から約束の地へ渡って行ったことを意味しそうです。とすると、後の出エジプトの時と同じルートを通ったことになります。このヤコブのカナンの地への葬りはやがての出エジプトの前触れとなったことになります。

カナン人はこの葬儀を見て驚きます。それはあまりにも荘厳な葬儀だったからです。そのような葬儀をされた人が、最後マクペラの畑地の洞穴に葬られました。ここにヤコブの信仰が現れています。エジプトの立派な墓よりも、彼はここを選びました。神の約束にとどまり、神がくださるものを受け取ることを何よりも望んだヤコブの証がここになされたのです。

さてヤコブの死後、ヨセフの兄弟たちが心配になったことが 15 節以降に記されます。「ヨセフはわれわれを恨んで、われわれが彼に犯したすべての悪に対して、仕返しをするかもしれない」と彼らは思いました。そこで父が死ぬ前にこのように命じたと 17 節でヨセフに告げます。「ヨセフにこう言いなさい。おまえの兄弟たちは、実に、おまえに悪いことをしたが、兄弟たちの背きと罪を赦してやりなさい」と。これは本当にヤコブが言った言葉なのでしょうか、それとも兄たちの作り話なのでしょうか。作り話と見る人の方が多いようですが、本当にヤコブがそう言ったと見る人もいくらかいるようです。いずれにせよ注目すべきはここで初めてヨセフの兄たちがヨセフに直接自分たちの罪について告白し、赦しを乞うたことが記されていることです。「今、どうか、父の神のしもべたちの背きを赦してください」と彼らは言い、またヨセフの前にひれ伏して「ご覧ください。私たちはあなたの奴隷です」と言いました。ヨセフはすでに彼らを赦し、受け入れていたことがこれまでの章から分かりますが、兄たちは自分たちの口ではっきりこのように述べることをして来なかったのでしょう。そのため赦しの確信を得ることができず、怯えていたと思われます。赦しを確信するためには、やはり自分の口から罪をきちんと告白するプロセスが必要であることを思わされます。

この言葉を聞いてヨセフはどうしたでしょう。彼の言葉から三つの大切なことを学ぶことができます。一つ目はさばくのは神であるということです。彼は言いました。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりになることができるでしょうか。」　ローマ人への手紙 12 章 19 節:「愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。『復讐はわたしのもの。わたしが報復する。』主はそう言われます。」　ともすると私たちは神だけが座るべき裁判官の席に自らが着こうとします。それは自分が神になろうとする行為です。ヨセフはそうせず、さばきは神に委ねています。

二つ目に彼は 20 節で「あなたがたは私に悪を謀りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとしてくださいました」と述べて、神の摂理への信仰を告白しています。神は事柄全体を良いように導いてくださった。もちろんだからと言って兄たちのしたことはそんなに悪ではなかったというのではありません。ヨセフははっきりと「あなたがたは私に悪を謀りましたが」と言っています。彼らのしたことは悪であり、責められるべきことです。しかし神はそこから良いことを取り出してくださいました。

これは神の主権と摂理を信じる信仰者にとっての慰めの教えです。もし神が本当に主権者であるなら、その神が良しとしたことしかこの世界には起こらないはずです。たとえ悪が行われても神は何か良いことをご自身により頼む者たちのためにそこから取り出そうとしておられる。その究極のケースはイエス様の十字架です。人々はイエス様を殺そうと図り、それを実行しました。その悪は責められるべきです。しかし神はイエス様の十字架の死から私たちの救いを取り出してくださいました。そういう意味で、神の主権と摂理を信じる信仰者は、この世で様々な痛みや苦しみを経験することがあっても、根本的には楽観主義を持っています。なぜならどんな人の悪も自分に究極的害を及ぼすことはできないと知っているからです。もし何か悪いことが私に起こっても、それはそのことを通して私に益をもたらそうとする神のご計画が背後にあるからであり、神は摂理の御手によって必ずそのように導いてくださることを知っているからです。ですから悪を行った人に向かっていきり立ったり、自分の手でさばかなくて良いのです。神にお任せして平安でいられるのです。むしろ神はこのことによって私を何か特別に祝福してくださる、と将来の楽しみがまた一つ増えたとさえ受け止めることができるのです。

それゆえに三つ目にヨセフは 21 節で兄たちに優しく接します。彼はこう言いました。「ですから、もう恐れることはありません。私は、あなたがたも、あなたがたの子どもたちも養いましょう。」 何という優しい言葉でしょうか。私たちは自分に悪を行った人に対しても、相手が悔い改めているなら、このように優しい言葉をかけることができるのです。神に深く慰められている者として神に喜ばれる行動を取ることができるのです。

最後にヨセフの死が記されています。彼は 110 歳まで生きました。彼は自分の子エフライムの子孫を三代まで見、また長男マナセの子マキルの子どもたちを膝に抱くことができました。一言で言って祝福の晩年を過ごしました。そして注目すべきは彼の最期の言葉です。24 節でヨセフは「私は間もなく死にます」と言います。父ヤコブと同じく、ここに彼の遺言が記されます。しかしこの創世記最後の部分にあるのは残念といった雰囲気ではなく、むしろ期待の雰囲気、期待の調べです。「私は間もなく死にます」と言いましたが、ヨセフは「しかし」と続けました。「しかし、神は必ずあなたがたを顧みてくださる」と。この「顧みる」と訳されている言葉は英語の聖書では visit と訳されています。つまり神は訪れる、神は来るということです。同じ言葉は創世記

21 章 1 節に出て来ました。そこでは「主は約束したとおりに、サラを顧みられた」とあり、サラにイサクが誕生したことが続いて語られています。そこでも神はいわば来てくださったわけです。そのように神はまた来てくださる。救いのために力強く行動してくださるとヨセフは言ったのです。

そこでヨセフは 25 節のことを述べますが、そこでも彼は繰り返して「神は必ずあなたがたを顧みてくださいます」と言います。そして「そのとき、あなたがたは私の遺骸をここから携え上ってください」と言いました。彼はすぐにカナンの地へ葬ってほしいとは言いません。神が必ずあなたがたを顧みて約束の地に上らせてくださる日が来る。それまでは自分の亡骸がエジプトにある状態で良いとしました。しかし神が訪れる日は必ず来る。そのときに私の遺骸をここから携え上ってくださいと頼んだのです。そこでその日まで保存するため、ヨセフの体もミイラにされ、棺に納められました。果たして、その後、この話はどうなったのでしょうか。それは続く出エジプト記に委ねられることになりますが、出エジプト記 4 章 31 節にここと同じ「顧みる」という言葉が出て来ます。モーセとアロンが民の前で語り、しるしを行ったのを見て、民は「主がイスラエルの子らを顧み、その苦しみをご覧になったことを聞き、ひざまずいて礼拝した」とあります。確かにヨセフが語った通り、神が彼らを顧みてくださったのです。神は訪れてくださったのです。そしてついにエジプト脱出となります。出エジプト記 13 章 19 節には「モーセはヨセフの遺骸を携えていた」と記されています。そして約束の地に上った後、ヨシュア記最終章の 24 章 32 節に「イスラエルの子らがエジプトから携え上ったヨセフの遺骸は、シェケムの地、すなわち、ヤコブが百ケシタでシェケムの父ハモルの子たちから買い取った野の一画に葬った」と記されます。ヨセフの遺言は確かにこのように実行されたわけです。

しかしこれをもってヨセフの言葉は言い尽くされたわけではありません。先に述べましたように約束の地カナンは天国の写しとしての意味を持っていました。ヤコブやヨセフが見つめていたのは約束の地カナンが指し示す本体である天の都、天の故郷でした。そしてこの約束とセットになっていたのは、神がやがて与えてくださる一人の救い主を通して、この祝福を実現してくださるということでした。その一人の救い主を通して罪ある者たちが贖われ、完全な祝福の御国へと入れられるということでした。この約束のために神が顧みてくださる行為は御子キリストが来たことにおいて決定的に示されることとなります。ルカの福音書 1 章 68 節で祭司ザカリヤは「ほむべき

かな、イスラエルの神、主。主はその御民を顧みて、贖いをなし、云々」と語りましたが、そこで「顧みる」と訳された言葉も、今日の箇所で「顧みる」と訳されたヘブル語に対応する言葉です。神は救い主を世に送ることにおいて決定的に訪れてくださったのです。そしてキリストは地上の生涯を歩み、十字架と復活のみわざを経て天の最も高き所に上げられました。そして後はこの方が再び来られることによる神の約束の最終的完成を待ち望むばかりの時となっています。

ですからヨセフは今日もここを読む私たちに語っているのです。「神は必ずあなたがたを顧みてくださいます。ご自身の約束を果たすために、あなたがたのところに来てくださるのです」と。それまでの間、私たちにはなお戦いがあり、悩みがあり、苦しみがあります。しかし私たちはヨセフよりもずっと良い位置にあります。すでに約束の救い主は来てくださり、贖いのみわざは成し遂げられました。あとは最後の神の訪れ、最後の神の行動を待つのみです。ヨハネの黙示録 21 章にはカナンの土地が指し示す真の約束の地、新しい天と新しい地のことが記されています。そこにおいてこそ神が私たちとともにおられるという祝福が完全に成就し、神ご自身が私たちの目からすべての涙をぬぐい取ってくださると言われています。そこにもはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもありません。そしてヨハネの黙示録最終章の 22 章 7 節でイエス様ご自身、「見よ、わたしはすぐに来る」と約束しておられます。

創世記はこの神の約束の最終的実現の日を指し示して終わっています。創世記はそのように前を向いている書です。私たちもこの書を読み終えて、創世記と同じように前を見つめて歩む者とされたいと思います。そしてこのヨセフが繰り返して強調した言葉を自分の心に響かせたいと思います。神は必ずあなたがたを顧みてくださる。神は必ず訪れて、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた約束の地、約束の御国へと上らせてくださる。このヨセフと同じ信仰に立ち、神が来てくださることを前に望み見つめて、族長たちに続く信仰の歩みを忍耐強く続けて行きたいと思います。そしてついに神の最終的な訪れを受けて、約束の御国へと上らせていただき、そこで神とともに、またその民とともに、永遠に喜び、楽しみ、生きる、この上ない幸いへと導かれる民でありたいと願います。